

# 青銅器の鑄型

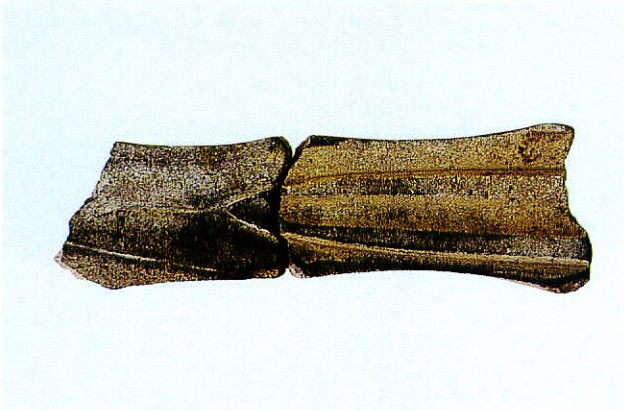
鳥栖市教育委員会



## 安永田遺跡出土の鑄型（国重要文化財）

鳥栖市では、29個体分、28点の青銅器の石製鑄型<sup>い が た</sup>が発掘調査等により出土しています。このうち安永田遺跡<sup>やすながた</sup>からは、銅鐸<sup>どうたく</sup>の鑄型片が2個体分、5点と銅矛<sup>どうぼこ</sup>の鑄型片4個体分5点の計6個体分、10点が出土しており、国重要文化財に指定されています。銅鐸の鑄型はいずれも「福田型」とよばれ、帯上の文様<sup>ようたいもん</sup>（横帯文）を主体としたもので、これらの中には「邪視文<sup>じゃしもん</sup>」という眼をかたどった呪術的な模様を持つものもあります。また、下部と思われる小破片にはエサをくわえた水鳥が描かれています。この鑄型でつくられた銅鐸は大きさ20cm前後の小型のものですが、まだみつかっていません。銅矛鑄型は4個体分あり、そのうち3個体分は「中広形銅矛<sup>なかひろがたうぼこ</sup>」という種類のものですが、そのなかの1つを再利用して側面に「中細形銅矛<sup>なかほそがたうぼこ</sup>」を彫り込んでいますが、こちらは未製品です。また本行遺跡<sup>ほんぎょう</sup>（江島町）からは安永田遺跡よりも古い銅鐸、銅剣、銅矛、鉞<sup>やりかん</sup>など18個体分、12点の鑄型片が出土しました。このほか平原遺跡<sup>ひらばる</sup>から銅戈<sup>どうが</sup>と種別不明の鑄型片が1点ずつ、大久保遺跡<sup>おおくほ</sup>から銅戈の鑄型片が1点、柚比本村遺跡<sup>ゆひほんむら</sup>から銅戈の鑄型が、前田遺跡<sup>まへだ</sup>から魚の形を彫り込んだ鑄型が出土しており、そのほかに鞆<sup>ふいご</sup>の羽口<sup>ほぐち</sup>（金属を溶かす炉に空気を送る送風管）や中子<sup>なかご</sup>等も出土しています。特に平原遺跡から出土した鑄型片は何を作ったかはわかりませんが、本行遺跡出土の鑄型片より古く、柚比遺跡群では早い時期から青銅器生産を行っていたことが明らかになりました。

## 柚比遺跡群から出土した鑄型



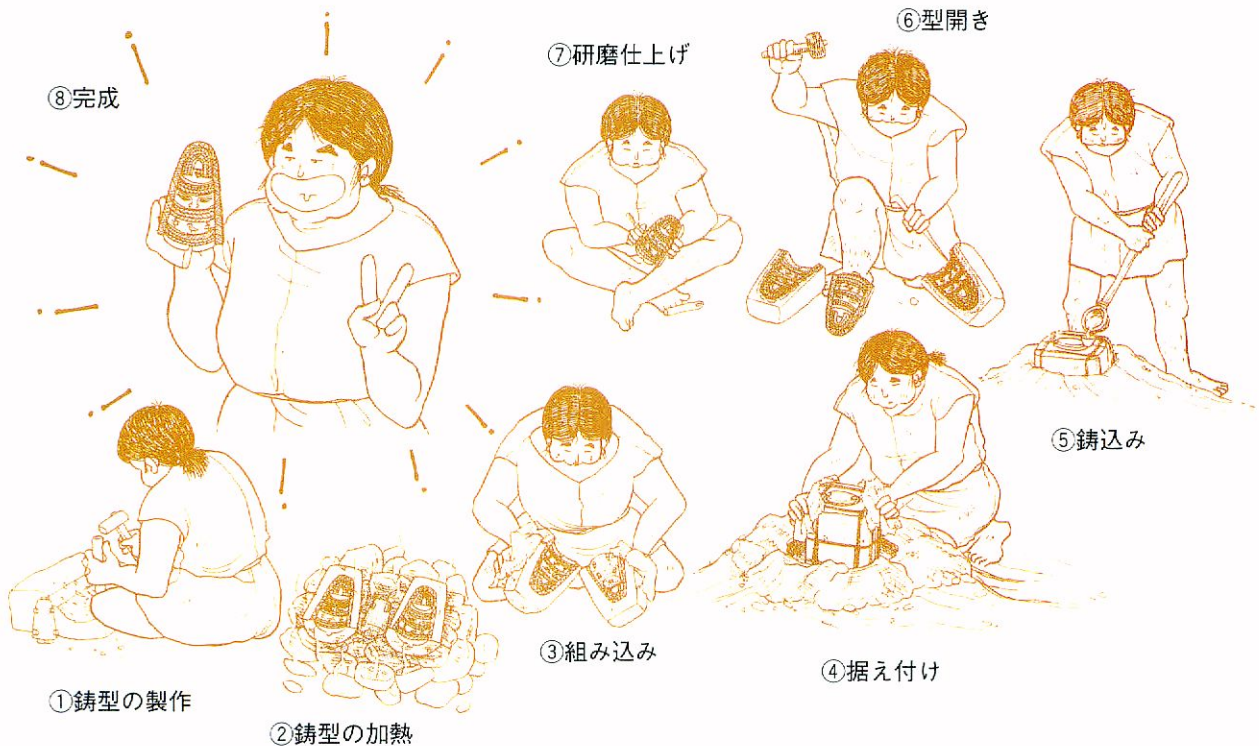
細形銅戈の鑄型（平原遺跡）

平原遺跡の弥生時代中期初めの住居跡から何を作ったかわからない鑄型片が、後期の住居跡から細形銅戈の鑄型片が出土しています。このうち鑄型は側面が砥石として転用された跡があります。これまで柚比遺跡群での青銅器生産の始まりは弥生時代中期後半とされてきましたが、この発見によって、日本で青銅器生産が始まった時期に柚比遺跡群でもその生産が行われていたことがわかりました。



魚の形を彫り込んだ鑄型（前田遺跡）

また、柚比本村遺跡の南側にある前田遺跡からは、魚の形を彫り込んだ鑄型が出土しています。この鑄型について、ほかに例がなく、何に使ったものかは現在のところわかっていませんが、「魚佩」と呼ばれる装身具ではないかとおもわれます。また、当時中国には「魚幣」という魚の形をしたお金があり、それに類似するものでないかともかんがえられています。



銅鐸の製作工程